

インフラなきユートピア

私たちの不自由のない暮らしは多様なインフラによって支えられていますが、そのすべてを維持し続けることは困難になりつつあります。

では、インフラが失われた先には、どのような暮らしが待っているのでしょうか。

つい悲観的な想像に陥りがちですが、歴史を振り返れば、今のようなインフラが整備されたのはごく最近のことにすぎません。様々なオフグリッド技術も生まれています。

本コンペでは、「インフラなき世界」での“住まい”を募集します。

失われてゆくものの大きさを認めたうえで、それでもなお「ユートピア」が成立するとしたら、それはどのような建築になるのでしょうか。

ここでいう“住まい”は、必ずしも一戸の住宅に限りません。従来の家族像に縛られる必要もありません。

ただし「人が暮らすための建築」であることを条件とします。

新しい技術は全てを解決してくれるのでしょうか？

周辺環境や地域との関係性も、より重要な要素となるはずです。

文：大井 隆弘（審査員長）

募集要項

●提出物

①プレゼンシート

用紙の大きさはA2判（420mm×594mm）とする。

着色など、表現上の制約はない。

各自の提案内容に沿って自由に提案すること。

※ユートピアの規模や定義は各自の設定による。

※インフラの定義は応募者に委ねる。

※計画地、計画面積、家族形態、生活様式等の制限はない。

また独立住宅、集合住宅、その他の居住形態の制限もない。

・用紙は縦使い、または横使いとし、1枚（片面）にまとめること。

・パネルなど巻けないものは不可とする。また模型などは受付ない。

・氏名や暗号等目印となるものは記入しないこと

②プレゼンシートのデータ：PDF形式

・データの保存名称には、作品名を記すこと。

・作品のPDFデータの大きさは「50MB以下」にすること。

・データはUSBメモリで提出のこと。

・USBメモリの本体に代表者氏名を明記すること。

③申込用紙

Webサイトから専用の申込用紙をダウンロードし、必要事項を記入の上、提出のこと。

●応募資格

応募資格についての制限はない。

●応募締切

2025年10月6日（月）当日消印有効

●審査員（順不同・敬称略）

審査員長 大井 隆弘
（三重大学准教授）

ゲスト審査員 西田 司
（株式会社オンデザインパートナーズ
/ 東京理科大学准教授 / JIA会員）

審査員 浅井 裕雄
（有限会社裕建築計画 / JIA会員）

北村 直也
（北村直也建築設計事務所
/ 名古屋造形大学非常勤講師 / JIA会員）

●表彰

金賞	1点	賞状、商品券 10万円
銀賞	2点	賞状、商品券 3万円
銅賞	3点	賞状、商品券 1万円
奨励賞	若干名	賞状、商品券 1万円
ゲスト審査員特別賞	若干名	賞状、商品券 1万円

●1次審査

日時：2025年10月19日（日）

会場：TOTO テクニカルセンター名古屋
（名古屋ビルヂング 12階内）

1次審査通過者には10月下旬頃に通知予定

●2次公開審査会・表彰式・記念講演会

2次公開審査会・表彰式・記念講演会

日時：2025年12月21日（日）

会場：三重大学レーモンドホール
（三重県津市江戸橋2丁目）

※詳細については10月下旬頃に
Webサイトにて公表予定

●その他

本設計競技の応募作品の著作権は応募者に帰属しますが、発表する権利は主催者が保有するものとします。（主催者の広告、ウェブサイト、その他の印刷物などへの掲載を含む。）

●提出先・問い合わせ先

〒460-0008

名古屋市中区栄4丁目3の26 昭和ビル5階

（公社）日本建築家協会東海支部 設計競技事務局

E-mail：jia.tokai.sekkei.kyogi@gmail.com

※問い合わせはメールのみ対応。



詳細はホームページにてご確認ください。

<http://www.jia-tokai.org/competition/top.htm>

主催：公益社団法人日本建築家協会東海支部

地方から建築を考える／建築から地方を考える

私たち建築家は、建築を通じて社会と関わっています。
建築を考えることは社会を考えること。社会を考えることは建築を考えること。
そうであるなら、私たちは、自らが暮らす「地域（社会）」を出発点として、皆さんとともに考えたいと思います。

たとえば、東海4県のひとつである三重県をみてみましょう。
三重県は人口約180万人と、全国で22位の規模を誇りますが、南勢地域を中心に12の自治体が「消滅可能性自治体」とされています。

伊勢市に隣接し、全域が国立公園に指定されている鳥羽市や志摩市、さらに熊野市・御浜町・紀宝町にかけてのリアス海岸がみられる地域では、人口減少と高齢化が急速に進行しています。

鳥羽市を例にすると、1995年に26,806人だった人口が、2025年には16,250人と、30年で約4割も減少。

すでに駅前では閉店した商業施設が目立ち、漁村では港から漁船が消え、農村には耕作放棄地やソーラーパネルが広がる光景が当たり前になっています。
教育施設の統廃合も進み、インフラの維持が限界を迎えている地域も少なくありません。

しかし、ここで悲観ばかりしては前に進めません。

現在の人口規模は、振り返ってみれば明治10年頃とほぼ同じです。
リアス海岸の漁村を結ぶパールロードが開通したのは昭和46年であり、それ以前は人々は船で行き来していました。
離島部では、1978年から1998年にかけて海底送水管が整備されるまで、自前で水を供給していました。

下水道はいまでも一部の町にしかありません。

鳥羽・志摩地域は海女の活動が最も盛んな地域であり、狩猟文化とともに厳しい資源管理の意識が根づいています。

また戦後にはリゾート開発が進み、近年も観光資源としてのポテンシャルが注目されています。

インフラとどう向き合い、どう選び取るかによっては、持続可能で、より魅力的な暮らしのあり方が見えてくるかもしれません。

ここでは三重県を例に挙げましたが、対象地域を限定するものではありません。
建築は万能な解決手段ではないかもしれませんが、それでも、建築にしか担えない「居場所」がきっとあるはずです。
ぜひ、あなたの視点で、インフラなきユートピアの姿を提案してください。



詳細はホームページにてご確認ください。

<http://www.jia-tokai.org/competition/top.htm>

主催：公益社団法人日本建築家協会東海支部